

学校法人江戸川学園 江戸川学園取手中・高等学校 「中・高生から見た多文化共生」



こちらからの依頼に『江戸川学園取手中・高等学校』生徒会のメンバーが快く応じてくれました。

生徒会では、楽しく学生生活を送れるようにライブや七夕祭、文化祭などのイベントを企画実施しています。また、ジェンダーレスの制服を考え取り入れたり、地域の人たちとのふれ合いとなるリサイクルプロジェクトを催したりしています。

多文化共生について意見を求めたところ、一般的な中高生とは環境の違いがありました。それは彼ら自身が取手市以外の地域から通学しているため、入学時に初めて会ったクラスメート

とまずはお互いを知り合うという経験をしています。また、クラスには外国籍の生徒もおり、多文化に接する機会が多いと感じました。

授業では道徳や総合的な学習の時間に多文化共生の学習をしています。学校の活動の中でも交換留学生との交流や修学旅行で行われる現地の留学生とグループで観光するという経験、夏休みのアフタースクールでの交流など多文化を知る機会が多くありました。これらの経験から自分と異なる環境で暮らす人と言葉が通じなくてもジェスチャーやアイコンタクトで理解しあえることを学んできました。これからも知り合うチャンスがあれば勇気を出して声を掛けたいと思うようになったそうです。他の文化や考え方を知り、共に生活していく中で多文化共生とは何かを考えるようになりました。そして、知らないことでの怖さが知り合うことで興味に変わったとも話していました。

事前にお願ひした質問への回答からこのからの取り組みとして相互理解と交流があげられ、そのために地域活動などに一緒に参加して知り合う機会を持てるといいとありました。「一人一人がお互いの個性や意見などを堂々と表現でき、お互いを認め合い、相手を理解するための話し合いを重ねて尊重しあいながら生きていく世の中にする」「キャンパスに描く絵は赤だけでは『火』、青だけでは『水』しか描けないがみ

んなで混ざれば未来も描ける」など若者の言葉が心に残りました。(河口)



2025年11月16日に楽天Kドリームスバンク取手(取手競輪場)で開催された「Cycle Art Festival 2025」の様子。江戸川学園の生徒とつくばスマイルの留学生が協働で多文化共生のブースを担当しました。一般の参加者(写真手前)は、留学生とのジェスチャーゲームや、よく使われる言葉を「やさしい日本語」に言い換えるという体験をしました。

参加者からは「もっと話したかった」などの感想が寄せられました。



多文化共生とは？ 外国人から見た 「日本で共に生きること」

ペルー出身で取手市在住30年の斎藤リリアナさんは、日本で暮らすことの理想と現実を身を持って体験してきました。異文化で共に生きるとはどういうことなのか？リリアナさんの話を通して、改めて問い直したいと思います。(下園)

まずはその土地の言葉を知ること。そこからすべてが始まる

斎藤リリアナさんは、ペルーで日本人と結婚し、夫の実家がある取手市に住んで30年になります。来日当初は、言葉の壁に苦労し、夫の家族との意思疎通もままならなかったそうです。時には片言の日本語を笑われて自信をなくしたこともあり。そんな生活を変えたのが「言葉を学ぶこと」でした。子どもが1歳になる頃、リリアナさんは取手市国際交流協会(TIFA)の日本語教室に通い始めます。教室を通して生活や日本の文化・マナーを学ぶようになると、友人もでき、生活が楽しくなったと言います。このような経験を経て積極的に地域社会へ参加するようになり、TIFAの役員を務め、教育委員会の日本語指導員をするなど、現在は様々な活動で外国人支援を行っています。

外国出身の親を持つ子どもたちの問題

リリアナさんは夫が日本人ですが、夫婦共に外国人の家族は、より困難な問題に直面します。子どもの教育やケアです。「海外から来た子どもたちは、日本語で気持ちを伝えられずに他の子どもとトラブルを起こすことがあります。親も日本語がわからないので、仲裁することもできません」そんな時は、リリアナさんが通訳に入って相談を受けることもあったそうです。働くために来日した外国人が家族を呼び寄せるケースも多

く、子どもの教育やケアは今後も重要な課題になっていくでしょう。しかも、それは子どもたちだけの問題ではありません。「いくら子どもが学校で日本について学んでも、親が学ぼうとしない限り、家庭内にギャップが生じてしまう」とリリアナさんは指摘します。親自身が日本の言葉、文化を学び、受け入れようとする意識を持たなければ、子どもたちの成長にも悪い影響が生じてしまいます。



(写真左から) 斎藤リリアナさん、取手市国際交流協会 志村俊晴会長

多様性、多文化共生について思うこと

外国人在留者が急増していることに関して、「日本の公共マナーやルールを守らない人が多いこと」にリリアナさんは強い懸念を抱いています。このままでは事件や犯罪が増える一方なのではと。これは言葉の違いで起きるトラブルではなく、価値観の違いにより引き起こされるもっと根深い問題です。

一方で日本の制度にも課題があると感じています。リリアナさんは、来日当初、日本の公共サービスの多くが無料であることに驚いたそうです。そのような社会制度や日本人の寛容さが、悪用される隙につながることを心配しています。「日本はもっと外国人に厳しく対処すべき」とリリアナさんは主張します。その意見には根拠があり

ます。リリアナさんの母国ペルーでは移民の流入による混乱が起きているからです。ヨーロッパの場合はもっと深刻な状況です。リリアナさんは強い語調で、真面目に暮らしている外国人が不法滞在者と同じように見られることへの悔しさもにじませました。

最後に日本に住む外国人へ向けて、リリアナさんからのアドバイスです。

「まずは日本語を学び、地域の人とコミュニケーションを取ってください。そして、日本のルールを守ること。その上で、自国の文化を紹介しましょう。」

取手市国際交流協会(TIFA) 志村会長インタビュー

取手市国際交流協会(TIFA)は、1989年に民間主導の団体として発足し、2002年に現在の名称に改めて活動しています。外国出身居住者が地域コミュニティに入るきっかけを作り、日本の文化や習慣を理解し、同時に彼らの文化と習慣も伝えることができるようイベントや企画を催しています。近年力を入れている活動の一つに外国出身者の子どもたちへの「義務教育支援」があります。

各地で外国人在留者の急増によるトラブルが懸念されていますが、取手市では外国人による犯罪が少ないとの報告を警察から受けています。外国人に対するフォローアップが比較的できているからだ実感しています。

「共生」は、お互いに理解し合わなければ成立しません。一方だけが譲るのではなく、折り合わなければいけないと考えています。そのためには、言葉が通じ合うこと、地域の実情を理解することが必要です。

TIFAでは様々な企画やイベントで市民と外国人との交流を図っています。ぜひ皆さんも参加してください。

